品川郷土の会 会報

令和5年(2023)11月
復刊第139号
発行人 坂本道夫
編集人 野口健夫

第482回例会延期

遺憾ながら11月も事務局の都合で準備作業が整わず例会を開催することが出来ませんでした。期待されていた向きには誠に申し訳ありません。どうにか体制を立て直し、旧態に戻したいと存じますので、今しばらくお待ちください。

第三日野小学校2013年探求学習 三年生インタビュー

10月23日(月)午後、前鮫浜小学校松本校長が転籍した第三日野小学校で三年生のCM作りプロジェクトのインタビューがあり、野口副会長と、しながわ観光協会事務局大越氏他が協力しました。しながわ花海道や中西芳香園のシクラメンに関心を持たれたようです。なお、11月18日(土)午前8時40分より、同校で父兄対象の発表会が開催されました。

坂本龍馬フィールドワーク

11月2日午後、区立浜川中学校PTAが主催する7年生を対象とした、PTA主催の坂本龍馬フィールドワークが開催されました。参加者は生徒100名の他、畑岡校長ほか教員、金邉学年委員長ほか父兄20名、吉田PTA会長、川村同窓会長など約130名でした。立正大学野呂先生と野口副会長が、講演と現地ガイドを担当しました。フィールドワークの周遊コースは例年通り浜川中学校を起点として、龍馬の歩いたであろう道を辿りしながわ花海道を散策する周回コースです。

坂本龍馬像前のフィールドワーク風景

フィールドワーク終了後の質疑応答

しながわ花海道歴史講座

昨年に引き続き、しながわ花海道周辺の史実を紹介する区民を対象とした「しながわ花海道歴史講座」全5回が11月2日から

30 日にかけて、東大井区民集会所で開催されました。講師は、永尾総務理事と野口副会長が分担し担当しました。

第 2 回講座風景

船上から品川御台場の跡を巡り天王洲散策 しながわ観光協会ガイドツアー

11 月 6 日(土)10 時から、北品川船宿船清を起点としたツアーが開催されました。船上講演は元品川歴史館副館長柘植先生、地上ガイドはしながわ観光協会ガイドが行いました、松本しな観会長、舟清 伊東社長、野口副会長や大田・品川まちめぐりガイドのメンバーが随行しました。参加者は応募 250 名から選ばれた 15 名です。

大嶋事務局次長による開会式

ＮＨＫ 総合テレビ 『ファミリーヒストリー吉岡秀隆』放映

11 月 6 日㈷19：30 から、以前、事前取材や品川神社周辺でロケがあり、野口副会長が取材協力や資料提供した『ファミリーヒストリー 吉岡秀隆』72 分拡大版が放映されました。前半 8 分ほどの所で、祖父たちが通った品川娯楽館の話があり、野口副会長の説明場面や当会提供資料が放映されました。

資料提供した娯楽館のパンフレット

坂本龍馬生誕 188 年御前祭

坂本龍馬の生誕日・逝去日にあたる 11 月 15 日は全国でこれに関連した行事が開催されています。立会川駅前の青年坂本龍馬像前でも 11 月 18 日(土)午前中、恒例の御前祭が品川龍馬会、東京京浜ロータリークラブ、立会川龍馬通り繁栄会によって執り行われました。

天祖諏訪神社宮司による祭祀

立会川龍馬通り繁栄会ではイベントも開催

リニューアルした品川歴史館正面

オープンはまだ半年先ですが、主体構造を活かしたまま池上通りに面した外観が一新され、その姿を現しました。一見するとその差は僅かに見えますが、外看板に一の外壁がパンチングで装飾されています。現在は開館に向け、外構工事、内装工事、展示場の工事を行っています。

10 月 24 日の状況

しながわ花海道 2013 菜の花の種まき

しながわ花海道西護岸・東護岸で 11 月 12 日(日)から 19 日(日)にかけて例年通り、来春に向けての菜の花の種まきイベントが実施され延べ 500 名が参加しました。

初日の種蒔き風景

シナガワハギが観察できる場所

シナガワハギが常時観察できる場所が、小平市の東京薬用植物園と江東区の木場公園内植物園にあり、現地を確認しました。ど

ちらも株は小さく、開花時期でないと探すのは難しい場所です。時期が過ぎているので花や実は確認できませんでした。

小平市・東京薬用植物園のシナガワハギ

江東区・木場公園内植物園のシナガワハギ

当会に関連した催し情報

鮫浜小・浜川小 坂本龍馬 出前授業

高知県坂本龍馬記念館学芸員を招いた、坂本龍馬出前授業が昨年に引き続き今年も 12 月 22 日(金)に実施されます。

○ 対象校と開催時間：

12 月 22 日（金）一日間

鮫浜小学校　10:40～11:25

浜川小学校　14:15～15:00

○ 担当講師：

坂本龍馬記念館

チーフ（学芸担当）三浦　夏樹　氏

寄　稿

最近入手した、シクラメン栽培文献の一部を、書き下したので紹介します。これによれば、上大崎には 102 年前、日本一のシクラメン栽培温室が存在したことが分かります。

副会長　野口　健夫

シクラメンの栽培について

千葉県立園芸専門学校　岩田 豊三

自　序

私が自分でも不満足の点の多い調査（報告）を、学校（千葉県立園芸専門学校、現 千葉大学園芸学部）へ残すについて、どうしても目次以外に自序を書かねばならなくなりました。なぜならば仮にこの調査が内容・外観ともに貧弱であっても、この一篇が、私が本校における学生生活の一端を後に残すもっとも有意義な、そして最も有形的なものになる訳ですから。内容が豊富で充実していたならば「沈黙は金」を以って満足するところでありますが、それが出来ず、いささか自責を感じ、この一文を草して弁解にかえるものであります。

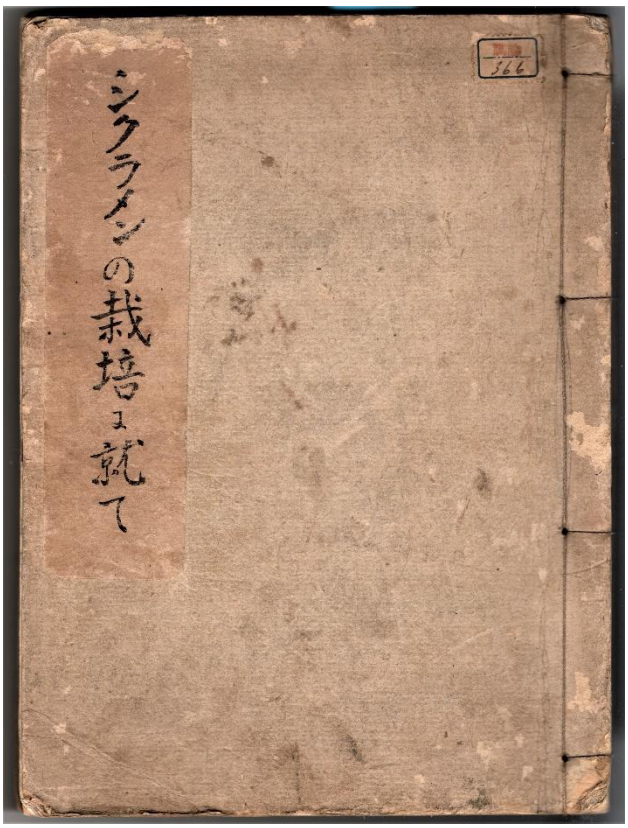
私は一般野外植物と高山植物の採集と分類の方法を今まで勉強してきましたので、花卉の方面の勉強が少し立ち遅れでしたので、大急ぎでシクラメンの調査にとりかかりました。最初の計画では欧米の栽培法を

調査し、次に本邦(日本)の栽培を記し、最後にその経済的方面の研究をしてみるつもりで着手しましたところ、英米の書物にはシクラメンの栽培に関してあまり詳しく記載した本がなく、いずれもホンの一般的なことしか書いてありません。いろいろ聞き込んだところによりますと、ドイツ、フランス、ベルギーには、その栽培が盛んで、従って文献も多いそうですが、これは到底、無力な私の出来るところではありません。ただ、一部ドイツのシュミット会社のカタログを見ただけでも、その如何に進歩しているかが解せられ、事情がかくの如き次第で原書によって原産地、分類、品種名を知り得たに過ぎず、栽培法の如きは甚だ簡単 (な説明) で到底、全貌を知ることが出来ませんでした。同じく本邦(日本)にもシクラメン専門の栽培を書いたものがありません。止むを得ず、自ら栽培家について実地に教えを受けて、また、自ら観察した所と併せて書くことにしました。幸いにシクラメンの栽培には十個年以上の経験を有し、現在、日本のシクラメン王と言われる、東京目黒(10 頁では大崎町上大崎)の芳香園主中西武雄氏について、親しく前後大正八年より数十回の示教を受け、大正十年八月中、同氏の温室にて、実習をなしたることが、この調査(報告書)を作る上に大いに好都合を得たるものであります。しかし、約十五ヶ月にわたるシクラメンの発育状態を僅かな日数の観察や実験では十分な知識を得られず、幾分想像を加えた点もあります。

なお、早咲法について、金沢市金沢ガーデン主鍔孫二氏(現存 割烹 つば甚の親族？)より、再三の示教を受け、これらを唯一の参考として書きはじめましたが、意外に統一性を図るのに骨が折れ、一方、各所に出したる照会の返信少なきために、期日の切迫に会い、仕方なく、まず、経済的方面を止め、病虫害の章を簡単にし、ようやく貧弱ながら出来上がりました。しかし、このような、まとまらぬ貧弱なものでも本邦(日本)では一番シクラメンについて、この一冊が多く書いたことになると言うことだけが、せめても私の喜びでもあり慰めであります。

終わりに、この調査を草する根本の力となって直接間接に助力して下されし、芳香園主中西武雄氏および金沢ガーデン主鍔孫二氏、東京府立園芸学校(現 東京都立園芸高等学校)盧貞吉氏(一八七二生、花卉栽培法などの著者)、その他の栽培家諸氏およびこの調査の材料の恵与、助言、忠告等を給わりし、同窓の井口健太氏、叶内松太郎氏(山形市・殖産相互銀行頭取と同一か？) 、平松丹次郎氏等に厚く御礼申し上げ、特に記して敬意を表する次第であります。

大正十年十一月廿五日



芳香園シクラメン専用温室内の著者(右)と中西武雄園主(左)

第一編　緒　論

春夏秋冬、四季とりどりの花、麗しと、いえども、なかんずく美しくして、あした香しきは蘭花なり。早春、花のまだ稀なる頃、蘭室にみなぎる芳香と崇高なる花容に人をして恍惚たらしめる、デンドロビューム。初秋の頃、緑室の深窓に目覚める、ばかり優婉なる花姿の人の心をもときめかすカトリアの麗！　あるいは白にあるいは赤に紫黄濃淡大小種々形を異にし、色香を競いて千変万化。真に鑑賞花卉の王たるの名に恥じざるものなり。されども、また、これら蘭花と比肩して、春の歓楽、夏の清涼、冬の温暖を助くるものにフリージア。チューリップ。ヒヤシンス。アネモネ。プリムラ。百合。スヰートピー。ダリア。ジンジャー。カーネーション。水仙。スノードロップ等の、各々それぞれの華姿優態を有し、人をして自然の恩恵の無盡にして不断なると思わしむ。路地の花は美し。されども温室内の花、更に濃艶なり。されどもまた思え。悠々たる大自然の下に天日と露とによって培われる野の花の清楚優雅なるもまた捨て難し。さらに目を転じて不断の白雪を頭に戴き白雲紅霞の中、縹渺（ひょうびょう）と聳える高山のお花畑に咲き競うアルパインプラントの崇高にして鮮麗！　典雅にして優婉なる花容を想え。実に花の至上美を高山植物に見ると言うも過言にあらざる可し。その他水中植物の美、寄生植物の姘花（へいか）の美、美の花は枚挙にいとまあらずと言えども、また各々の花には、またその花特有の美点あり、長所あり、芳香あり、その間に優劣を一概に論ずべからず。花の美は神聖にして絶対的なり。決して熱帯蘭科植物の美は高山植物の美に優り、牡丹の美はダリアの姘麗を凌駕する等の言を言うこと能わざるものなり。

ここにシクラメンは別名アルパイン・バイオレットと呼ばれる如く、元来高山性植物なり。しかるがゆえに、この花には一種言うべからざる気品の存するにありて、いわゆる高山植物性の美を有す。しかして、また、多年、他の球根植物とともに多年、園養せられしが故に、チューリップ、アネモネ、ヒヤシンス等に比し、その艶麗なる点に些かの遜色を見ず。また芳香種にありては、その快感的なる香りは蘭花、フリージア、スヰートピー、君影草（スズランの別名）に比し、いささかも劣る所を見ず。花の群れて競い咲く美観は、胡蝶の寄りて、夢見る如く、暗海の彼方、漁船の篝火（かがりび）点々たる如し。加うるに葉の斑紋ありて、冬を凌ぐ美観は、常春藤（キズタ）、クロトン、アカリファをして、後に撞着たらしむ。

すなわち、芳香、美容の点よりすれば、蘭の如く、しかも高山植物の典雅・端麗なる気品を具備し、さらに、葉の美観を添える。まことにシクラメンの如きを花中の花と言うべきか。

さらに、これを実用上の観賞植物として見るも、植物の全形に比し、花形大にして人

の注目を惹きやすく、その温雅にして快感的なる芳香は、いかなる人にも深き好印象を与える。花の開かざる間は、葉の眺めに雅致を有し、切り花としても相当の需要を有し、鉢物にしての用途も広く、あるいは水盤に盛られ、あるいはウヰンドーガーデニングの飾付に珍重せられる。また、さらに、プール、ウオーターガーデンの縁植として風到を添える。かくのごとく優美にして、有利なる花卉は、けだし他に類を求むること難かるべし。

そもそもシクラメンの栽培が比較的困難なりと見らるゝは、少しくその性状・取扱いが他の球根類と異なるためにして、元来、この植物が高山性なると、また、これがために排水良好にして、しかも不断の温気を甚だしく好むものなるがゆえに、今日までその栽培が比較的困難とせられしものなり。されば特にこの点に注意し、シクラメンに特有なる点を考慮して適当なる栽培管理を行うときは、甚しく栽培の容易なるものにして、しかもその価格、他の球根類に比し、高価にして、甚だ将来有望なるものなり。故に筆者は、特に多数の花卉中、シクラメンを選びに選びて、その栽培を説明せんとする所以なり。

第二編　性　状　論

第一章　原産地および栽培史

シクラメンは桜草科シクラメン族の球根植物にして、学名のCyclamenはギリシャ語のKyklicos or Kyklosより来りしものの如し。即ち、すなわち円形または回転を意味し、英語のCycle or Circkeに似たり。英名をソウブレッドSow-Bread、あるいはアルパイン・バイオレットAlpine Vaioletとも呼び、ドイツにてはアルパイン・フェイルチェンAlpen Vehlchenと称せられる。アルパイン・バイオレットは恐らくドイツ名の直訳ならん。本邦(日本)にては英名ソウブレッドをそのまま直訳せるブタノマンヂウ(豚のパン)と言われ、またその花容姿態よりカガリビ草・篝火花の美名あり。前者の広く知らるるに反し、後者の世に知らるること少なし。しかし、無風流この上なきブタマンヂウをこの優美なる花の名に冠するよりも、この花にこよなく相応しき篝火草の名こそ普及せま欲しきものなり。漏れ聞くところによれば、明治年間のことなり。昭憲皇太后陛下、新宿御苑にて、この花をば、みそなはせられ、その名を御尋ねあらせ給ひし時、カガリビ草と答えまつりして、いたく御賞美あらせられし由来さえ有りと言う。学名をそのままシクラメンと呼ぶこと最も一般に流行し、またラテン(語)読みにキクラメンあるいはサイクラメンと呼ぶ者あり。

学名の由来はこの植物が回転的の線より成り、かつ花茎開花後おうおう撚曲旋回するに依るものなるべし。また、英名のソウブレッドはこの植物の根茎が原産地地方にておうおう野豚に喰われところより来るが如し。また、独・英のアルペン・フェルチェインあるいはアルパイン・バイオレットはこの種の高山性のものが、一見バイオレットの如き姿態と芳香を有するところに起因するものならん。

シクラメンは南ヨーロッパ、北アフリカ、南アジア等に野生するものして、ことに地中海近傍およびコーカサスの高原あるいはシシリア島に産し、その種中にても、さらに美花を付くるシクラメンペルシャム、一名ペルシャンシクラメンはシリヤを原産地とする。またギリシャ、小アジアの原産とも言われる。特に、聖地パレスタイン地方に多いと言われる。

また、シクラメン・イベリカムなる種はコーカサスを原産地とし、シクラメンカウム種は南欧温地の産にして、またコーカサス、小アジア、ギリシャ、トルコ等に多く野生し、アフリカナムはアルジェリア、チュニスに。芳香をもって名高きユーロピアムは中央および南部欧州の山地に高山植物として野生し、シシリカムはシシリア島に原産す。
欧米におけるこれが栽培は古くより行われたるが如くその中でドイツが最も栽培、改良、研究に長ずる如し。

これらが、国に抱ける栽培歴史については、筆者の手に文献の記すべきもの無く、二、三外国の知己を頼りにして紹介をなし、その他多少の努力を試みたなれども、微力のためと調査期間切迫せんことを恐れ、これを略するの、止むなきに至れり。他日の完成を望むものなり。

本邦(日本)においては、少数ずつ栽培せられたるは、今より五十年前(明治四年1871)よりの、ことなるが如し。本校(千葉県立園芸専門学校)の林修己先生は故福羽氏(福羽逸人氏)と明治十五年頃、この花を栽培されたる由にて。また、大阪にても米国人が明治十年頃種子を持ち来たり、栽培せし等の話を聞く。これを、営業的に栽培を、開始せるは筆者の調査によれば玉川八軒茶屋付近なる永井賞花園永井氏なる人が東京にて初めてのこれを営業的に栽培したる由なりとも、現今では永井氏より種子を譲り受けて栽培を開始せる東京府下荏原郡大崎町上大崎白金下屋敷(この字名は見当たらない)八〇八 中西芳香園、盛大となり賞花園は衰微せり。その存在も疑わしく、筆者が照会を出しても返事なく、ただ実地踏査する時間なかりしを遺憾とするところたり。

現今、シクラメン栽培の歴史においても、技術および栽培鉢数においても東京第一とせらるゝは、前述の中西芳香園なり。同園のシクラメン栽培は明治四十四年(1911)に源を発し、年々鉢数を増加し、最初暫くは、三十鉢なりしを、大正六年(1917)に至りて、六千鉢、大正九年(1920)は実に一万鉢を突破し、大正十年(1921)の播種数、実に二万粒に及べり。従って単に同園の歴史のみにてシクラメンの流行並びに歴史を知るに足るので，その大要を記せば次の如し。

明治四十四年永井賞花園より種子を、譲り受け栽培を、開始したり。暫く当時のフレームにて三十鉢を作り出せるに過ぎず。しかるにたちまち人(客)ありて、その全部を一鉢(四寸)金五十銭ずつにて買いとらんとの申し入れ来たれり。

当時、物価安き時代にして、珠に花卉の鉢物にてプリプラ一鉢八銭か九銭位の時なりし故、シクラメン一鉢五十銭の卸値は全く破格なる価なりと考え、半信半疑にて、ようやく五鉢を売り渡したと言う。しかるに是は全く一時的なものにあらず、また、破格にもあらずシクラメンとして至当の価なることを知るに至り、中西氏は、最も集約的なる都会付近の園芸として、最も高価なるものを栽培するの利なる点より、考え及び、ついに意を決し、シクラメンを専門に栽培するに至りしものなり。

かくの如き次第なる故、芳香園の硝子室はシクラメン栽培を目的として特に設計されたるものにして、また本邦(日本)におけるシクラメン栽培に一大エポックを作れるものというべきなり。

[第二章以降第四章まで五十余ページ分は専門的なので割愛しました]

第五章　本邦(日本)に於ける栽培と流行

現在、本邦(日本)におけるシクラメン栽

培の景況は一層盛んとなりしものの如く。従来栽培せる営業者は年々鉢数を増加し、一方、従来着手せざる花卉園芸業者も近来競うようにて、これが栽培を開始するに至れり。東京付近にては目黒、大崎、小金井、鹿骨(ししぼね　江戸川区)、鎌倉、中野等の当業者にほとんど栽培せられざる無きほどの盛況を呈せり。

また、市中、市外の貴族、富豪、園芸愛好家、植物園、東京府農事試験場、園芸学校等にも温室花卉の重要部分を含む。

筆者が、大正十年(1921)度現在について、関東、関西にて主なる栽培家に照会を発して調査せるところを述べれば次の如し。

◎所名および場所と栽培鉢数

中西芳香園　東京府下下目黒下屋敷(10 頁では大崎町上大崎白金下屋敷八〇八)一〇〇〇〇鉢

藤井酸花園　大阪天下茶屋四〇〇〇鉢

盧貞吉氏園　神奈川県三浦郡西浦村二五〇〇鉢

壽園園芸部　兵庫県鳴尾(前年筆者訪問時は数百鉢であり、数値が大きすぎる)三〇〇〇鉢

金沢ガーデン　金沢市六斗林町弓町二〇〇〇鉢

さくら花園　神奈川県三浦郡下浦村一〇〇〇鉢

東京千草園　東京府下堀之内五〇〇鉢

戸越農園　東京府下荏原郡戸越村五〇〇鉢

伴田農園　東京府下荏原郡六郷村二〇〇鉢

中西良太氏園(大阪府下瓢山)、横濱ガーデン(横浜市青木町)、翠香園(大阪天王寺)、旭園(大阪天王寺)、和楽園(大阪天王寺)、鎌倉ガーデン(相州鎌倉町)は返信なし

シクラメン王　中西武雄氏

なお、以上の他にも数多く全国に亘って調査すればその数も莫大なものあらん。この調査は微力なりしと、期日短かかりしと照会に対して返信無きもの多かりしために鉢数の流行に伴う調査となすべきを心掛けたる最初の目的は失敗に帰したるも、幾分、各地における需要の一端を覗き見ることができる。少なくも栽培家の所在地を知る点にても多少の効果あるべきを信じて疑わず。

流行の点について考えれば、元来シクラメンは比較的価格高く、昨年東京大曲植本会社売店、銀座辻村農園売店、三越楼上園芸部、泪橋花壇、三田育種場売店等にて筆者が調査せし所によれば、一鉢の売価最低一円、最高十円にして、二円五十銭位のものが最も多く、しかも売れ行きは同時節に現る、プ

リムララマコイデス、シネラリア、スノードロップ、福寿草、梅に比して遥かに良好なり。欧米にてはクリスマスおよびイースターの室内装飾としてその季節には欠くべからざるものの如く需要がある。従って、近来、本邦(日本)にても外人間およびその方面の需要少なからず。

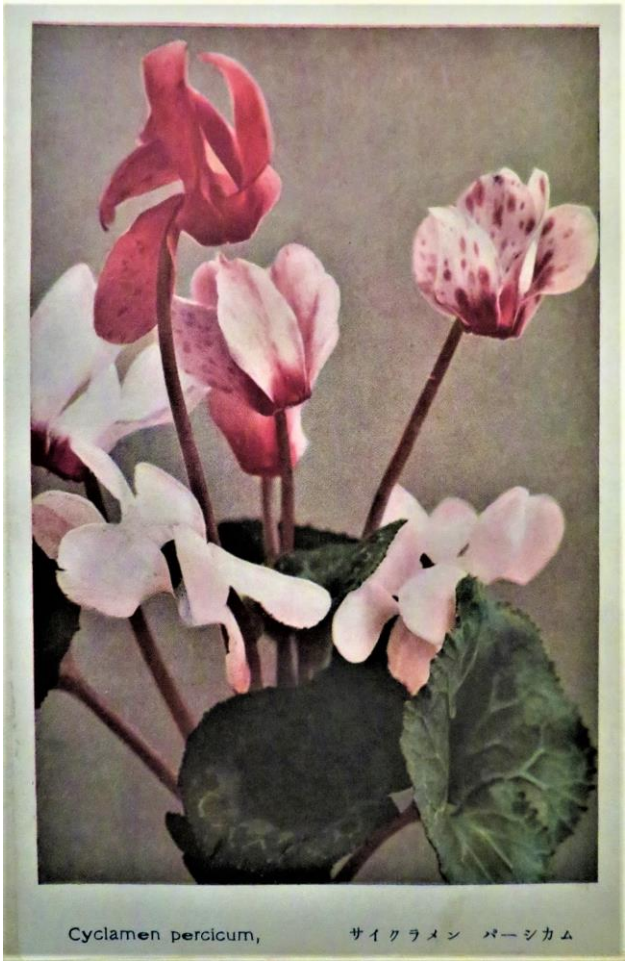
切花としても冬季の花少なき候なるために需要年々増加する傾向あり。一般向けの用途は花少なき候なる故、単に一鉢位を客間に飾りなすが如き。あるいは贈答品とせられ少しく洋風の家にては窓庭に数個を並べ、半ば栽培的に装飾とせらる。また、近年、日本式の床の間に調和する如く水盤に清砂を盛りたるものに二、三の色を揃え寄せ植えせるものあり。あるいは岩に植え付けて盆景の如く見せたるものあり。その他の植物と混植して盛花の如く見せたるものあり。洋風と進歩と日本風に調和する技術の発達により、前者によれば益々クリスマスデコレーション等に需要を増し、後者によれば本邦在来の活け花、盛花の一部分として将来の流行はいよいよ有望なるものあらん。

[第三編七十余ページ分は一部を除き専門的なので割愛しました]

第三編　第二章　冷室と温室

……中西芳香園は特別なる同園の地勢(南北に傾斜している)を利用して、ベンチ(高床)は地平面と同一平面にし、特に通路を掘り下げたる特別な構造を有せり。故にベンチは斜面の一部にして上部より地表近くで不断の押水ありて常に適当の湿気を保ち、これを覆う硝子屋根は風を防ぎ、空気の湿気を保ち、よくこの植物の性状に適応するものなり。……

南側斜面に作った温室



報告書の挿絵

郷土・郷土史関連図書情報

品川区内地域や郷土史に関連した図書を紹介します。興味のある方は、書店等で入手するか近くの公立図書館などで閲覧下さい。

1. 地方豪族の世界　古代日本をつくった 30 人

神話・伝承の時代から平安時代末までの地方豪族三十人の知られざる躍動を描き、その人物像を紹介。中央・地方関係の変遷を解明し、地域史を立体的に復元する。著者は東洋大学文学部教授で日本古代史の専門家で、2014 年刊岩波講座日本史 2 の「国造と屯倉」の中で本会でも何度か取り上げた多氷に言及している。

今回の著作でも 7 番目に日本書紀安閑天皇に記載された南武蔵の豪族、笠原直死使主(かさはらのあたいおみ)を取り上げられている。「多氷」の『「多摩」誤記説』には他地域との位置関係から異論を唱え、多氷＝大井の方が妥当だとの見解を示し、掲載地図でも編者が唱えたように多氷を大井地域に比定している。敗者の小杵(おき)の勢力範囲にも言及している。旧説に異議のある者にとっては有力な根拠資料である。

著　者：森 公章
発　行：筑摩書房
判　型：四六版
頁　数：224 頁
価　格：1720 円(税込)
発売日：2023 年 10 月 16 日
ISBN：978-4-480-01788-8

2. 明治東京名所図会　幻の画人山本松谷

古書なので書店購入はできませんが、明治時代(29 年～44 年)に画家山本松谷が、絵筆を担い東京の名所を尋ね歩いた本を編集したものです。神社・仏閣・街の佇まい・子供の遊び、など千点に及ぶ作品の中から 116 点を選び、明治の姿を今に伝える生きた風俗史です。特に『八ッ山附近の景』には、八ッ山橋下にあった旧品川停車場、後に旧京急路面電車となる馬車鉄道線、旧第一京浜国道が一枚の中に全て描かれており一見に値します。なお、本書は原本復刻版など体裁の異なるものも復刻され出版されています。

編　者　山本　駿次朗
著　者　山本　松谷
出版社　三樹書房
価　格　1500～3000 円(税込)
頁　数　135 頁
発売日　1979 年
判　型　横長 B5 変形版

3. 地名の原風景　列島にひびく原始の声

地名について基本から見直してみる試みの著作である。日本列島の野にも山にも里にも川辺・海辺にも、すべての土地に貼り付いている名前＝地名。その一つ一つには、その地の形状や景観、またそこで営まれていた人の暮らしのありようを言いとめようとする声が文字以前の時代から響いていたはずである。あるいは言い換えられ、あるいは文字に書き留められて変容を遂げながら、その基底に今も遺っているその初発の声はどのようなものだったのか、どのような生

まれ方をしたのか、本書はその一端を探る試み。「野」と「原」に原意で、どんな差があるのか、地名を解く際に改めて考える糸口を見つけることが出来るかもしれない。

著　者　木村　紀子
出版社　平凡社
判　型　新書
出版年月 2023 年 10 月
ISBN　9784582860412
頁　数　192 ページ
価　格　1,012 円（本体 920 円＋税）

4. 幕末維新解剖図鑑

地元出身歴史考証専門家山村竜也氏の最新作です。幕末維新期には魅力的な人物が多数登場しました。本書では、男女 100 人を選び、その人生を図解で紐解いています。人となりや交友関係、思想の変遷、歴史に果たした役割が分かります。さらに歴史のターニングポイントとなった出来事（事件簿）をはさみこむことで、通史としても理解できるよう工夫しています。

著　者　山村　竜也
出版社　エクスナレッジ
判　型　A5 版
出版年月 2023 年 8 月 1 日
ISBN　978-4-7678-3127-5
頁　数　192 ページ
価　格　1980 円（税込）

当会の関連行事について

品川郷土の会
第 482 回例会お知らせ

第 482 回例会は年末を避け 1 月に開催する予定です。詳細は未定ですが、ご希望のテーマや分野があればご連絡ください。検討したいと思います。出欠確認は、ご希望などを鑑み、追って往復はがきで、ご案内いたします。

（復刊 139 号おわり）

品川郷土の会や本誌についてのお問合せは、
〒140 - 0015　品川区西大井 2-22-18
Pete.nog@arrow.ocn.ne.jp　野口まで